

■総合相談室

総合相談室はソーシャルワーカー(以下、SW)とケアマネジャー、退院支援看護師(以下、退院支援Ns)が協働する部署である。当室のケアマネジャー・退院支援Nsにはベテラン看護師(以下Ns)が配属され、多職種混合で各専門職の視点を活かすことを特徴としている。K棟玄関すぐ右手のカウンターの奥には地域医療支援部の広いオフィスに、総合相談室の他、訪問診療、訪問看護、訪問PT、地域医療連携室、亀田産業ホームケアサービスの訪問介護員とケアマネジャーが共に居り、朝には約80人が顔を合わせる。

SWは科別に担当を決め、毎週37の定期カンファレンス(病棟Ns、医師、リハビリ、薬剤師、栄養士等)に参加し、関与が必要な患者情報をいち早く得て、タイミング良く関わられるようにしている。医療サービスの向上、在院日数の適切な短縮等を目指している。精神保健福祉士(P SW)も席を並べ、日常的にリエゾン介入ができる環境となっている。「総合病院の精神科」として当地域の貴重な社会資源となっている。

当居宅介護支援事業所は重介護者を多く受け持ち、特定事業所の認可を受けている。

【総合相談室】介護保険施行(2000年4月)に向け、1990年10月、SWとケアマネジャーで新設。2008年4月、退院支援看護師を新設。2008年10月居宅介護支援事業所は特定事業所加算Iを取得。

【亀田リハビリテーション病院】2004年6月開院以来、SW2名を派遣し、本院も絡めた視野を維持しながら、この地域の貴重な社会資源として機能するよう努めている。

【精神科病棟】2005年6月精神科病棟開設時よりP SW2名を配置。現在4名。当地域唯一の精神科と身体科の合併症をカバーできる総合病院精神科(40床)である。院内リエゾンも定着し、精神科訪問看護の他、地域移行支援会議、就労支援事業所や市とのケース会議等へも積極的に参加している。

【亀田ファミリークリニック館山】2006年6月開設時から、館山地区担当ケアマネジャー3名が勤務。

【安房地域医療センター(館山市)】2008年度太陽会が運営開始し、2009年1月からSWを出向。2011年度、太陽会「総合相談センター」として中核地域生活支援センター「ひだまり」を合体させ、出向SWがセンター長に就いている。ひだまりには精神科分野を含む多重問題の困難ケースが多く、専門家の力が必須で、当室P SWが週1回コンサルテーションを行っている。

1. 総合相談室の業務内容と2020年度の目標と実績

2020年度の目標は、①COVID-19対策、②介護・診療報酬の算定、③時間外勤務を減らし体力温存、④質の向上、⑤外来患者の支援等をあげた。まず、①COVID-19対策の1年だったと言っても過言ではない。部内から感染者を出さぬように普段の生活上の予防策を徹底し、COVID-19に関する院内の情報は部内に周知するだけでなく、地域のCOVID-19情報を集め、タイムリーに院内の感染対策本部やベッドコントロール室にも伝えた。院内の対策が患者家族や地域に影響し、地域の情勢が院内のベッドコントロールに直接影響することを実感した。全館面会禁止の中、退院に向けた家族との面接や病棟での対面指導や介護調査に関しても、自主的に嚴重チェックとし、各市や事業所にも説明・連絡をし、理解を得た。

②は後述。③は職員の退職等で時間外が多くなる月もあったが、体調を崩す者は出なかった。④は予防で集会研修は殆ど見送りとなったが、部内研修だけは続けた。短期介入の多いSW、長期間介入のケアマネジャーやP SW、退院支援看護師と特色を活かした事例発表をした。⑤外来患者に関しては日替わり担当制とし、レビューで振り返りをしたが回数を増やす必要性を感じた。「外来神経難病カンファレンス」を

2月毎に神経内科外来Ns、退院支援Ns、病棟Ns、SWで開催し、情報共有した。

地域の病院訪問も自粛したが、2医療機関とリモートで交流した。近隣の一般病院、療養型病院等20数件の空床状況を毎週水曜に聞く事は継続しCOVID-19情報もやりとりし、ベッドコントロール室等とも共有した。退院支援Nsも院外の訪問看護ステーションへの訪問は自粛した。

当院居宅介護支援事業所では通常業務に加え、病院の面会禁止に伴い、年度末から介護調査委託を大量に受託することとなった。

12月頃、業務改善の声SWから上がり、有志を中心に、他部署とも入念な話し合いを持ち、3月までに9点の改善をほぼ達成した。新たな時代の開幕を感じる出来事であった。今後も改善の風潮を継続したい。

2. スタッフ

室長：鎌田喜子 副室長：児玉照光、主任：清水洋延、師長：吉野有美子、所長：打野弘子

ケアマネジャー 9名（看護師3名、社会福祉士3名、介護福祉士3名）

退院支援看護師 4名

ソーシャルワーカー 19名（PSW4名、亀田リハビリテーション病院2名、安房地域医療センター1名を含む）

3. 業務統計

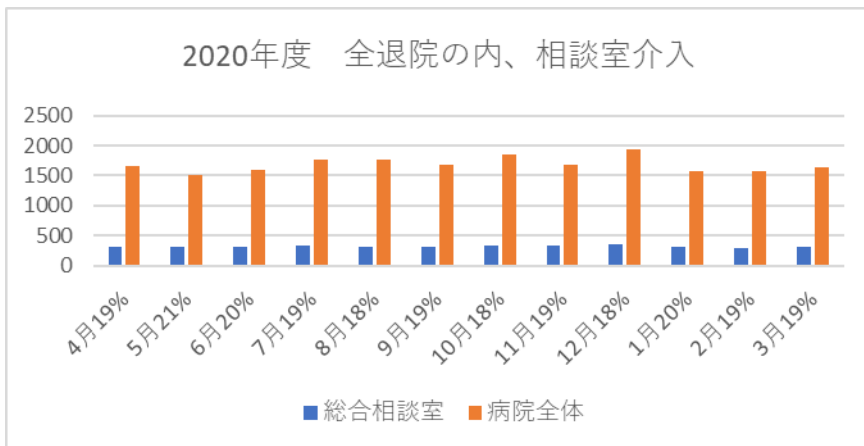
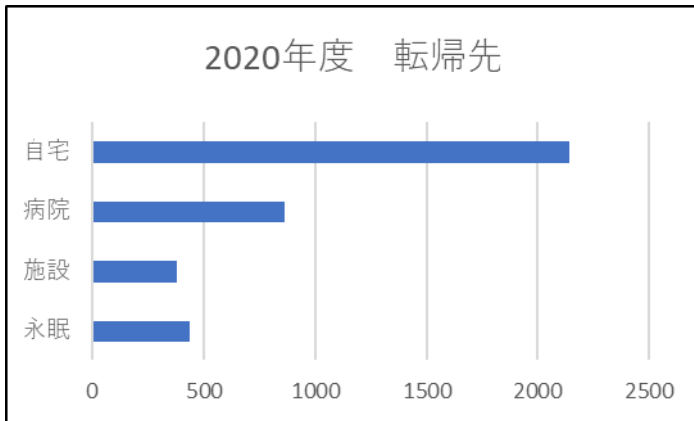
2020年度、総合相談室関わったケースは再介入を含めると4961件(2019年度5059、以下同様)だった。うち、外来は976(954)件、入院は3514(3631)件、受診歴のなしは139(162)件だった。亀田リハビリ病院は286(312)件、受けていた。

総合相談室が関与した退院数(亀田リハビリ病院含む)は3844(3939)件だった。病院全退院数の17.5%(18.1%)に関わっていた。転帰先は自宅が2141(2083)件、病院へは863(950)件、施設へ377(428)件であった。自宅退院のうち訪問看護や訪問診療へ繋いだのは320(270、2018年度180)件と増大していた。一般病院へは172(204)件、療養型病院は215(240)件、回復期リハビリ病棟へは329(359)件で、うち、亀田リハビリ病院へは251(278)件ほど転院した。死亡は439(439)だった。施設は老健施設が多いが、薬価等の関係でサ高住や有料老人ホームが増加し、追いつきそうである。当院からは病院130(91)ヶ所と施設139(116)ヶ所へ退院していた。

科別受付数(入院+外来)の上位5は、総合内科653(2018年度782、以下同様)件、脳神経内科498(480)件、呼吸器内科426(311)件、循環器内科403(423)件、腫瘍内科334件であった。COVID-19は総合診療科が担当していた。一昨年6番に浮上した腫瘍内科がついに整形外科を上回ったが、呼吸器内科と腫瘍内科からの外来患者の依頼が多い。通院困難になる患者を在宅医療に繋ぐ依頼が多かった。がん患者さまの依頼は増え続けている印象がある。

訪問看護は37(28)ヶ所の訪問看護ステーションに繋ぎ、訪問診療も31(28)ヶ所の診療所に依頼し、自宅での療養生活を引き続き医療面から支えて頂いた。

退院支援加算1は1061(1557)件、介護支援連携は1014(1397)件、退院時共同指導料は119(104)件算定した。



退院支援加算
 1061(1557) 件
 介護支援連携指導料
 1014(1397) 件
 退院時共同指導
 119(36)件

文責 鎌田喜子

* P S W (精神科ソーシャルワーカー) の業務

4名のPSWが、当クリニックや救急外来受診の患者さま、当院精神科病棟や身体科病棟で合併症のある患者さまを対象に相談や依頼に応じた。合併症治療に関しては特に、精神科リエゾンチームの一員として活動し、当院の治療機能を更に活かしてもらうべく、近隣の精神科病院との間で円滑な連携体制を築くことに努めてきた。

一方、早期退院の為の治療的プログラムへの参加や、退院後の再発・悪化の予防や早期介入を目的とした精神科訪問看護指導を実施した。

初挑戦として、8月より中核地域生活支援センターひだまりとPSW交換留学を開始。地域と病院のお互いの特徴を理解し、近い将来、地域を包括した支援を構築できると期待している。

〈病院内〉

- ・精神科訪問看護：Ns と共に実施：17 件
- ・退院前訪問指導：3 件
- ・リエゾン回診／カンファレンス：医師、看護師及び臨床心理士と共に参加（毎週火曜日）
- ・精神科病棟プログラム(入院生活技能訓練)：27 件
- ・行動制限最小化委員会：医師、看護師及び臨床心理士と共に参加（毎月 1 回）

〈病院外〉

- ・精神障害者地域移行支援協議会：安房地域／夷隅地域（毎月 1 回）
- ・安房地域心の健康のつどい実行委員会（毎月 1 回）
- ・その他（不定期開催）：安房保健所断酒学級設営に係わる支援協力
鴨川地域精神障害者家族会オレンジ会への支援（毎月 1 回）

文責 清水洋延

4. 介護保険関係

居宅介護支援事業所として、主任ケアマネジャーの認定を 4 名が受け、特定事業所加算 I の認定を取得している。これにより、介護度 3 以上の利用者を 40%維持しなければならない。地域包括支援センターから困難事例や医療依存度の高い方等の紹介を受けている。予防給付の委託は受けていない。

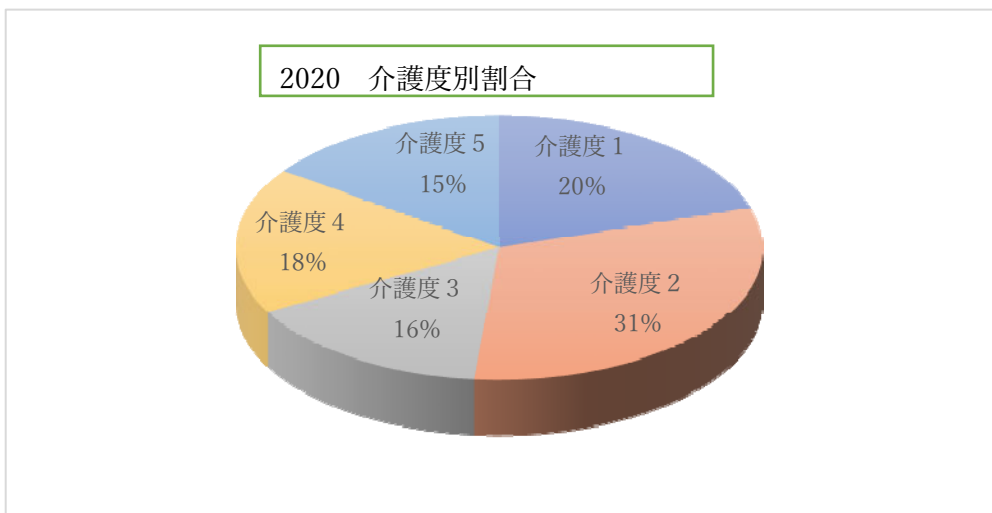
当院のケアプラン数全体では、介護保険導入当初と比して、ケアマネジャー一人当たりの受け持ち数に制限が加わったことにより、おおよそ 300 件前後である。当院のケアマネジャーと契約している要介護者の介護度別の内訳は以下の通りである。

末期がん患者の新規契約者は月 10 名ほどあり、最期の貴重な時間を自宅で迎えたい患者に短時間で、在宅生活を送る為の医学的管理や環境整備などを行い、スムーズに在宅に帰れるよう援助した。これからも増加すると見込まれ、在宅診療や訪問看護等との連携を密にしていく必要がある。

最近では介護保険の普及により、低い介護度からサービス利用している利用者が増えてきたことにより、重症者 40%維持が難しくなりつつある。今後も当相談室の特徴を大いに発揮し、他職種との連携を密にすると共に、ケアマネジャーの質の向上に努めていかなければならないと考える。

又令和 1 年 1 月 1 日～千葉県への委託を受け指定市町村事務受託法人の指定を受けている。それに伴い入院患者の要介護認定調査にかかわる事務を行っている。他県や各市町村の依頼を受け月平均 10～15 件の認定調査を実施している。

文責 打野弘子



5. カンファレンス・教育・研修・啓発活動

(1) モーニングカンファレンス・ケースレビュー

- ・毎朝、当相談室スタッフ全員で行われ、前日の新患登録患者と退院患者の報告と検討が行われる。

(2) 部内勉強会・カンファレンス

〈合同カンファレンス：SW・ケアマネジャー・退院支援Ns〉第1・3(水)朝

長期介入等の事例発表や研修報告をした。

〈各職種別カンファレンス〉

- ・カンファレンス：SWは第1(水)朝、ケアマネジャーは毎週(火)夕方、退院支援Ns毎週(木)研修報告、ケーススタディ、業務連絡等を行っている。
- ・ケースレビュー：SWは第2, 3(水)朝、3チームに5~6人の発言しやすい人数でレビューとタイムリーな事例検討等を行っている。
退院支援Nsは毎週(火)朝、レビューと最新情報(処置、物品、地域情報等)を共有している。
- ・外来レビュー：第4(水)SWと退院支援Ns合同で、外来ケースのレビューや検討をしている。

(3) 学会・研究会発表

- ・看看ケアマネ連携フォーラム 千葉県看護協会 発表 12/9 高畠和江

(4) 講師派遣

- ・介護職員初任者研修 皆川絵理、齋東清道、藤井さゆり、打野弘子
- ・千葉県立長狭高等学校 医療福祉コース講義 皆川絵理、齋東清道、藤井さゆり、打野弘子
- ・亀田医療技術専門学校 第1・第2看護学科 「精神看護学3」 清水洋延、栖原千智 7回
- ・亀田医療大学ゲストスピーカー 打野弘子、吉野有美子、鎌田喜子
- ・亀田医療大学大学院 実践看護学特論IV(在宅看護) 吉野有美子

(5) 研修会開催

- ・『大学生向けSW研修会』COVID-19感染防止の為、残念ながら開催せず

(6) 実習生受入

- ・亀田医療大学3年生「在宅看護学臨地実習」 2020年9月~12月 11回 21名

(7) 地域連携訪問 リモートにて2機関(2018年度 38機関)

文責 鎌田喜子

6. その他の活動

がん相談支援センター

当院は国の地域がん診療連携拠点病院の指定を受け、「がん相談支援センター」を総合相談室が担っている。2020年度はCOVID-19の影響で、サロンや就労支援講演会など、人が集まる集会は中止とした。

【相談】年間延べ1,416件の相談(面談・電話相談)があった。

【ピア・サポート】千葉県地域統括支援センターが行うピア・サポーターズサロン千葉については、毎年、当院でも年1回開催していたが、2020年度はCOVID-19予防で開催しなかった。

【患者会】「アロヒカイ」やガーデニングボランティア「ナチュラルガーデン」の活動が円滑に進むよう支援をした。

【がん冊子・書籍・チラシ】がん関連の冊子・書籍、がん講演会等のチラシや患者会情報等を掲示。

【院外研修】千葉県がん診療連携協議会相談支援専門部会では、相談員の質向上と連携強化目的に研修会を年2回開催してきたが、2020年度はCOVID-19影響で「アピアランスケアを理解し支援する」(Web研修)1回開催となり2名参加した。両立支援コーディネーター研修会(Web研修)にも2名受講した。

【相談支援 Q&A 集作成】千葉県がん診療連携協議会相談支援専門部会にて県内がん相談支援センターによる「相談支援 Q&A 集」作成を企画。就労、AYA、妊孕性、アピアランスの4分野に分け、当院はAYA世代を担当した。次年度冊子での完成予定。

◆担当：児玉照光、牧野恵美、速水真紀江、吉野有美子、君塚法子、唐鎌房子、大橋洋子、黒川亜純、北浦寿子、黒田宏美、川名清子

文責：児玉照光

安房地域難病相談支援センター

千葉県内には難病相談支援センターが9ヶ所設置されている。安房地域を担当する当センターでは「医療・福祉の総合的な相談、情報提供、講演会の開催、就労支援、また患者会等の自主的な活動を支援するなど、地域で生活する難病患者やその家族の日常生活の質の向上」を目的として活動している。

【相談件数】 249件 (3/31現在)

【コミュニケーションエイドの貸出事業】伝の心、指伝話、レッツチャット、スイッチ類、ポータブルスプリングバランス(右利き用)の貸出を実施。今後も当院リハビリスタッフとも協力し、新しいコミュニケーション機器の導入も検討していく。その他、日常生活用具給付事業や補装具費支給制度等の手続き支援もしている。

【吸引研修】「介護職員等による喀痰吸引研修等第1・2号研修」を継続学習センターの協力を得て毎年実施しているが、COVID-19の影響で各病院が面会制限中で実地研修が行えず中止した。

【研修会】COVID-19の影響で実施せず。

【交流会】毎年恒例12月「クリスマスコンサート」を開催しているが、COVID-19予防の為、自粛した。

◆担当：大川薫、高梨歩実、石井知美、高嶋和恵

◆事務局：大橋洋子、中村雅代

文責：高梨歩実

ノーマリゼーションセンター

障害者雇用促進を目指し、活動している。2011年1月に開設したワークサポート室に療育手帳、精神保健福祉手帳を持つ職員11名が働いていた。業務内容は院内各部署から依頼される発送作業やシュレッダー、スキャナ、PC入力、清掃、ナチュラルガーデン水まき、入院ベルト作成等々である。

2020年6月は雇用率2.2%を達成したが、2021年3月に雇用率が2.3%に引き上げられ、不足となった。

2021年度は念願だった専従職員の雇用が叶った。引き続き、法定雇用率の達成と、スタッフの就労継続を目標に取り組み、展開していく。

◆担当：齋東清道、橋本理恵、白野光、福原由美子(人事課兼務)

文責：橋本理恵